令和２年度　　社会科研究のまとめ

下伊那教育会社会科委員会

Ⅰ　研究テーマ

社会的事象に興味・関心をもち、自分の学びを実感できる社会科学習
～さまざまな状況下でも主体的に学び続ける個につながる学習方法の追究～

Ⅱ　研究テーマの視点（コロナ禍を考慮して）

視点①　「新型コロナに伴う学習への対応」少ない授業時間の中で効率的かつ確かな学びをするための方法（家庭学習の併用、ICT 機器を利用した授業など）の模索。

視点②　「授業づくり」思考力・判断力・表現力等の育成のために、単元を貫く学習問題を大切にし、社会的事象の意味や意義を問題解決的に解き明かす単元構成の在り方。

視点③　「自他との関係」子どもたちが、お互いの考えを共有し、相互にかかわりあいながら学び、深める学習形態の在り方。

視点④　「子どもの育ちにつながる評価」個に始まり、個に終わる授業を基本として、子どもたちが自分の成長を実感し、その後の学習に生きるふり返りの在り方を探る。

Ⅲ　研究の内容

１　学び続ける個の姿とは

現在のコロナ禍において学習にも様々な制約が出ている。このような状況下でも主体的に学習に取り組み、より多くの考えに触れながら確かな力を身につけること、また自分に力がついている（成長している）ことを実感し、その後の学びへの意欲を持ち生かしていくことが、学び続ける個であると考えた。

２　取り組んだ研究の視点について

（１）視点①については、コロナ禍で直接他人と関わることが難しい状況となっており、ＩＣＴ機器の活用や社会見学の見直しは不可欠と考えた。

（２）視点②については、地域教材や現代社会の課題を含む題材を扱うこと、単元を貫く学習問題を設定すること、視点③や視点④が生きる単元デザインとすることが、学び続ける個の実現のために大切であると考えた。

（３）視点③については、直接他人と関わりづらい状況下や小規模校の多い下伊那でも他者と関わりながら学べる学習方法の追究は重要と考えた。

（４）については、単元を貫く学習問題について、学習カードを用いて毎時間振り返ることで、社会事象について問いを持ち続けながら学習することが学び続ける個につながると考えた。また、自分の成長を自分で実感することが自信と意欲を持ち、学んだことをその後の学習に生かすことにつながると考えた。

Ⅳ　研究で明らかになったこと（見えてきたこと）

１　各校で課題となっている新型コロナへの対応

５月に郡内各校に対して行ったアンケートの結果、見えてきた課題の中から、社会見学に関わる課題、効率的な学習を含めたＩＣＴ機器活用を取り上げ、次の文書を各校に発信した。

本年度の社会見学について

下伊那教育会社会科委員会

この資料は7月下旬に作成したものですが、その後感染が拡大している地域も増え、社会見学や県外への移動について新たな指針を示している市町村等もあるようです。資料は参考としてご覧いただき、各校で感染状況も踏まえた対応をご検討ください。

1　本年度見学地についての課題から

（1）トヨタ、三菱自動車の工場見学ができない（主に小学校５年生）

①　愛知県の別の工場等を見学したい場合三菱自動車については予約済みだった学校に一旦全てキャンセルにさせていただくという連絡が来ています（見学再開の目途は立っていないとのことです）。各校で代わりの工場等見学として以下のような場所が検討されています。

・ＴＯＴＯ愛知工場（常滑市）　　・リニア･鉄道博物館（名古屋市）
・セントレア（常滑市）　　・トヨタ鞍ヶ池自動車記念館（豊田市）

②　県内の工場等の見学をする場合

元々日帰りで社会見学として自動車工場の見学を計画していたような場合、県内の工場の見学をして学習することも考えられます。臨海学習として計画していた場合はなかなか行き先の変更はしづらい場合もあるかもしれませんが、工場見学ができない分、別の機会に地元企業見学して学ぶことで授業を充実させるという考え方もあります。

県内で郡外の見学先として以下のような場所が検討されています。

・エプソンものづくり歴史館
・盟和産業
・夏目光学株式会社
・株式会社協和精工

郡内の地元企業見学に変更することを検討している学校もあります。県内に大手自動車メーカーの自動車組み立て工場はありませんが、自動車に使われるネジ、ワイヤー、プラスチック部品など下請け企業として自動車関連部品を作っている企業はたくさんあります。また、自動車関連製品ではなくても誇りを持って製品作りに取り組んでいる企業もたくさんあります。

・「地元で自動車関連部品を作っている工場がどこにあるか分からない」「どの会社がどんなものを作っているのか分からない」という声を聞くことがあります。各市町村にある商工会議所では、会員になっている企業について把握していますので、問い合わせると教えていただける場合が多いです。飯田市は飯田商工会議所でも教えていただけますが、飯田産業センター（エスバード）に問い合わせると資料（パンフレット）も用意されているようです（ＨＰから検索・ダウンロードできるものもあります）。
・実際に見学可能か、授業に協力してもらえるかどうかは各校で直接その企業に連絡を取り交渉してください。

資料例　「企業ガイドブック　NESUC-IIDA」https://nesuciida.com/
南信州の様々な企業の一覧を見ることができます。
企業の特徴や得意とする技術、加工品などが掲載されています。
「失敗しない地元就活2020　飯田精密機械工業会」
南信州の精密機械工業会社が３６社掲載されています。
企業の願いや加工品、福利厚生などが掲載されています。

（2）県庁の見学ができない（主に小学校４年生）

本年度は早々に県庁の見学は中止する旨の連絡が各校に届いたと思います。「県庁を見学できないのであれば長野市まで行かなくてよい」と考えて長野市以外の場所を検討している学校が増えてきたようです。

長野市以外の見学先として以下のような場所が検討されています。

松本城（松本市）	・ボランティアガイドさんから文化財保全についての話も聞ける（要予約）。
開智学校（松本市）	・松本城と同じく後方指定されている ・ボランティアガイドは当面休止中
大王わさび農園（安曇野市）	・扇状地の湧水を利用した農業 ・屋外での見学なので密を避けやすい
信濃毎日新聞塩尻制作センター〈塩尻市〉	・印刷工場見学、新聞紙のリサイクルの話など
アルプス公園（松本市）	・北アルプス、松本盆地の展望ができる
諏訪湖（釜口水門）	・天竜川のスタート地点で天竜川の水量にも影響を与えている
岡谷蚕糸博物館（岡谷市）	・展示品見学中心
エプソンものづくり歴史館（諏訪市）	・エプソンの歴史が学べる。技能道場の見学ができるが、製造工場の見学はできない

2　社会見学全般に関わる課題

（1）予定していた行き先がどう考えても行けない場合はどうしたらよいか

○見学地を中止、行き先変更、延期など様々な選択肢があると思いますが、社会科の学習の目標や内容を基に見直し、新たな行き先を検討することもよいのではないかと思います。その際、学習の目的に合わせて方面を限定せず地元を含めた検討をしてはいかがでしょうか。
※各校で検討中の行き先などの情報は校長会でまとめてくださっていますので、各校校長先生にお尋ねください。

（2）その他

○施設によっては人数制限を設けていたり、申し込み方法が変更されていたりするところもあります。事前に問い合わせるなど情報をよく確認してください。
○県外の企業ではなく県内の地元企業の見学でも、充実した授業が行うことができます。地元企業を見直す機会にもなりますので、ぜひご検討ください。

つかってみようICT～社会編～

社会科委員会

準備が面倒…使い方がよく分からない…どうやって活用するの？と、ちょっとハードルが高い気がするＩＣＴ、これを機会にちょっと活用してみませんか？

活用方法

その１　社会見学・リモートインタビュー

感染症の関係でなかなか見学に行けないときに、映像をつかって見学ができます。

例①：三菱自動車リモート工場見学

https://www.mitsubishi-motors.com/jp/newsrelease/2020/detail5466.html

例②：オンラインで長野県庁見学

→長野県すみっこクラブの長野県庁のオンライン見学

利点としてあげられること

①移動時間がかからない

②要点が見学できる

③要点の見学なので集中しやすい

④当日欠席の児童も自宅でオンライン見学ができる

他校でも県庁との打ち合わせでオンライン見学が可能です。

詳しくは下記の連絡先に問い合わせをしてください。

Web社会見学（オンライン県庁見学）ついて

１　申込先（問合せ先）について

お問い合わせやオンライン見学を希望される場合は、下記へご連絡ください。

（１）環境部・危機管理部を併せて実施を希望される場合

長野県危機管理部危機管理防災課　（担当）米山

（電話）026-235-7184

（２）環境部・危機管理部のいずれか片方でも対応可能です

○環境部：環境政策課企画係　（担当）戸谷　（電話）026-235-7169

※10 月以降は電話にて「Web県庁見学」とお伝えください（担当異動のため）

○危機管理部：危機管理防災課防災係（担当）米山（電話）026-235-7184

２　申込をされる場合

- 申込書がございますので、そちらへご記入いただき提出いただく形になります。
- 希望日によっては担当者の日程が確保できない場合がありますので、なるべく早めに日程のご相談をいただけますと幸甚です。
- （特に危機管理部）台風の接近や災害が発生する等の事由が生じた場合には、数日前あるいは当日に対応できない場合もございますが、ご容赦くださいますようお願いします。

長野県危機管理防災課　米山

例③：ZOOMで商店にインタビュー

でもやっぱり、実際に見たい時は、受け入れてくれる近くの見学場所に依頼してみましょう。近くにどのような見学場所（企業）があるか分からないときは、飯田産業センター（エスバード内）、または近くの商工会議所へ。

その２　動く資料

動く資料の活用で子どもたちが関心を持ちやすいように工夫できます。

例①：デジタル教科書の活用

動くグラフ（導入の時に）

インタビュー動画（リモートでできない場合、見学の受け入れをしていない場合など）

例②：ランドセル工房のどこでも社会科見学（土屋鞄）

https://tsuchiya-randoseru.jp/pages/kengaku

その３　遠隔合同授業

遠くの学校や近隣の学校と一緒に授業をしたり、交流したりするときにＩＣＴの利用が有効な場合があります。

例：ZOOM利用　スカイプの利用

→長野県すみっこクラブ遠隔交流

交流校の一つ下水内郡の栄小学校さんが2011年3月12日に栄村を襲った大地震について学習したことを発表してくれました。床一面に食器の破片が落ちている写真が「これは私の家です」と説明され、住宅や公民館が傾いている写真も身近なものだけに息をのむような感じを子どもたちは受けました。防災の備えについても実際に役場の人に聞いたり、自分たちで調べたことを発表したりしてくれました。防災食のパンの試食や毛布を実際に広げて見せてくれたのはとてもわかりやすくてよかったそうです。遠隔合同授業でなければ栄村の地震をこんなに身近に考えることはなかったと感じていました。授業後にはすぐに和田小学校の防災倉庫の場所を確認する姿がありました。

～ZOOM等オンライン会議ソフトを使うときの留意点～

オンライン学習に使えるソフトにはZOOM、google meet（google classroom）、Microsoft teamsなどいろいろあります。ソフトによってできることやできないこと、上限の違いなどがあります。それぞれの特長を生かし、自分の学校では何が良いか検討してみてください。

使う時、特に普段あまり使っていない場合は以下のことをチェックしておきましょう。

- マイク、スピーカーの設定…相手の音が聞こえるか、相手に聞こえているかをチェックしておきましょう。使い慣れているソフトでもパソコンが違うと設定をやり直す必要があることが多いです。
- どのように映っているかの確認…相手が見えているか、相手から見えているかなどの基本的なチェックの他、どの角度なら全員映るのか、紙に書いたものを画面越しに見せるような場合は相手に文字などはっきり見えているかなどもチェックしておきましょう。
- 子どもが操作できるか…子どもたちが操作する必要がある場合は慣れておくことが必要です。校内で友達とやりとりしたりして練習しておくと良いでしょう。

2　高森南小学校の授業から

～小学校５学年　「私たちの生活と食料生産」小単元「高森町の市田柿作り」～

（1）授業の概要

「私たちの生活と食料生産」では、自分たちの身近なものである「市田柿」を題材に、日本農業全体が抱える課題について考えた。「農家数が減っているのに、生産量や販売額があまり変わらないのはなぜだろう」を単元を貫く学習問題として設定し、柿農家やＪＡみなみ信州の取組をもとにその理由を考え、高齢化や後継者不足など日本の農業全体が抱える課題を捉えながら、これからも市田柿づくりを続けていこうとしていることについて考えた。

（2）授業の実際～農家の取組に着目して理由を考えていったＣ児の学び～

第１時では、柿農家数の変化、市田柿生産量・販売金額の変化の３つのグラフ資料から、「農家数が減っているのに、生産量や販売額があまり変わらないのはなぜだろう」という単元を貫く学習問題を設定した。そこで、子どもたちは、４年時に実施した総合的な学習の時間の市田柿工房見学やこれまでの生活経験をもとに、単元を貫く学習問題に対して予想を考え、Ｃ児は次のような自分の意見をもった。

Ｃ児：１人１人の農家の生産量がとても多い？

そして、この単元を貫く学習問題を解決していくためには何を学習していけばよいかという学習計画を考えた。Ｃ児は、何をどう調べていけばよいのかの見通しを立てることはできなかった。また、他の子どもたちの中には、「市田柿の値段を知りたい。」という意見があり、市田柿というものがどういったものなのかという事実認識を確かなものとするため、「市田柿と呼べる干し柿になる条件とは何だろう」という次時につながる学習問題を設定した。すると、自宅で市田柿づくりをしている子どもは、「おじいちゃんに聞いてくる！」と主体的に追究しようとする姿が見られた。このような姿から、地域教材を扱うことが、教材を身近に感じ、自ら追究していこうとする意欲を喚起していると考えられる。

第２時では、「ＧＩマーク（ブランド化の証)」「市田柿生産工程管理マニュアル」「市田柿品質基準」の資料を提示し、市田柿と呼べる干し柿の条件を考えた。産地が限定されていることや作り方に細かなきまりがあることに気付いた子どもたちは、「乾燥状態」「粉の量」「色上がり」「シワキズ」「皮付き」「大きさ」といった品質基準が市田柿の条件であると学習問題の答えとしてまとめ、それをもとにして単元を貫く学習問題の振り返りをした。

Ｃ児：農家さんががんばってブランド品の市田柿を作っているから、生産量や販売額があまり変わらない？

Ｃ児は、市田柿のブランド化に着目し販売額が変わらないと考えた。このように、ブランド化→品質が高い→値段が高いというように事象を関連的につなげ、それが販売額の安定につながっていると考えることができた。しかし、Ｃ児は、農家の何らかの取組が生産量の安定につながっていると考えていたことから、次時は、「農家は市田柿を作るときに、どんなことに気をつけているのだろうか」という学習問題を設定した。

第３時、高森町山吹で柿作りをされている河合さんのお話を聞いてまとめたパワーポイントを見て、学習問題について追究した。

わたしの市田柿づくりの工夫は、
①機械化…柿剥き、運ぶ、乾燥、冷房などの機械を導入、
②便利化…建物を改築して、スムーズに柿作りができるように、
③大量生産…少ない人数でたくさん作れるように
わたしの市田柿づくりのこだわりは、
①見た目重視…きれいなほうが値段が高くなる、
②収穫時期…タイミング良く収穫することで、良い品質の干し柿になる。

河合さんのお話をもとに、この時間の学習問題の答えをまとめ、単元を貫く学習問題の振り返りをした。

C児：市田柿を作っている人が販売額を決めているのか。別の人（お店の人とか）が決めているのかが分からない。

生産量や販売額の安定の原因が農家の取組の工夫にあると考えていたC児は、河合さんの話を納得した様子で聞き、農家の工夫や努力についてまとめたが、単元を貫く学習問題を振り返ったときに、販売額を誰が決めているかという新たな疑問をもった。そこで、「農家さんの他に市田柿作りを支える人はいるのか」と次時の学習問題を設定し、予想を立てた。

第４時、前時で子どもたちは、農家の他に市田柿づくりを支えている人として、「運送の人」「ＪＡの人」「お店の人」と予想した。そこで、「農家さんの他に、だれが、どのように市田柿づくりを支えているのか？」という学習問題を設定し、ＪＡみなみ信州果実柿課の梅田さんにＪＡの市田柿づくりを支える取組についてお話をいただいた。ＪＡみなみ信州としては、市田柿づくりを支える取組として次の４つについて主に取り組んでいるというお話をいただいた。

ＪＡの４つの取組
①柿部会での研修会
②販売（日本全国)、試食、ＳＮＳでのアピール・宣伝
③新しい農家を増やす
④市田柿工房と農家さんの関わり

梅田さんのお話から学習問題の答えをまとめ、それをもとに単元を貫く学習問題の振り返りをした。

C児：ＪＡさんが農家さんを手伝って、宣伝をしたりして、市田柿を売っているから生産量や販売額があまり変わらない。

C児は、ＪＡの取組の①と②、④に着目して振り返り、柿部会での取組を通して、ＪＡが農家を支えることが生産量の安定につながり、ＳＮＳなどによる宣伝が販売額の安定につながると考えていることが伺える。また、④については、市田柿工房の取組が農家を助け、大量生産につながっていると考えていることが伺える。第１時から一貫して、農家を中心に考え、その取組を支える存在としてＪＡがあると考えていることが伺える。

第５時、前時の振り返りで「市田柿は、海外へ輸出していないのか？」と新たな疑問をもった児童の考えを全体で共有し、市田柿の出荷量のグラフを提示した。そこから、「海外にも輸出している」という事実を知った子どもたちは、「なぜ市田柿を外国に輸出しているのか？」という疑問をもったので次の時間の学習問題として設定し、予想した。子どもたちは、「食べてほしい」「高く売れる」「外国人が欲しがっている」などの予想をし、もう一度ＪＡから話を聞いて、外国へ輸

出している理由について知りたいと考えた。そこで、学習問題を追究するため、改めてＪＡみなみ信州果実柿課の梅田さんに来ていただき「市田柿の輸出量」「月別の輸出量」などの資料や写真を提示していただきながら次のような要点でお話を聞いた。

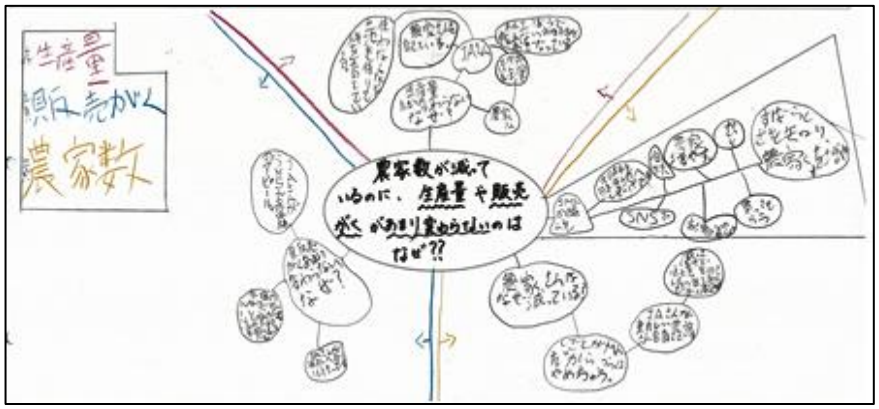
市田柿を海外にも売りに行く理由
①値段が下がりすぎないようにしたかったから。
②海外から自分の国で売りたいというねがいがあったから。
③食材として市田柿を使ってほしいから。

市田柿の月別の輸出量

話を聞いた後、ＪＡみなみ信州梅田さんのお話をもとにして、学習問題の答えを「値段が下がりすぎないようにしたり、食材として使ったりするために海外に輸出している」とまとめ、単元を貫く学習問題の振り返りを行った。

Ｃ児：生産量は、JA さんが手伝って増やしていて、販売額は、外国に輸出したり、外国の人が売ってくれるから、あまり変わらない。

Ｃ児は、海外に輸出することで、売り上げが下がらない＝販売額の安定につながり、さらにそうすることで販売者が増えることに気付き、販売額が変わらない理由になると考えていると推察される。(生産量についての記述は見られなかった)。これまで一貫として農家を中心に考えてきたＣ児は、生産量について、ＪＡが手伝うことで増え安定につながっていると考えていることが伺える。



第６時、第１時から第５時の学習をもとに、単元を貫く学習問題「農家数が減っているのに、生産量や販売額があまり変わらないのはなぜだろう」の答えを考える時間を設定した。これまで扱ってきた農家とＪＡの両者の取組について、より視覚的に分かりやすくするとともに、事象同士の関連を考えて説明できるように、イメージマップを作った。最初は、それぞれが１つの線でしかつながっていなかったが、これまでの学習カードを見返したり、友だちとの意見交換や全体での交流をしたりすることを通して、複数の線でつながったイメージマップをもとにして、単元の学習問題の答えを書いた。

Ｃ児：農家さんがＪＡさんと協力して、販売額が下がりすぎないように海外に行って売ったり、柿農家さんを増やしたり、伝統を守るために市田柿というものをずっと作り続けてほしいという思いで作っているから。

第１時では、農家のみに注目し、その内容も漠然としていた。しかし、単元を通して、だれが、どのように取り組みをしていて、どのような思いや考えをもってその取り組みをしているか、具体的に記述することができるようになった。第６時の答えを見てみると、農家と JA の具体的な取組やそれぞれが協力することが生産量と販売額が変わらない理由になっていると考えている。

第６時の終末の部分で、単元を貫く学習問題の答えを書いた後に自分自身の第１時の予想を見

返した。「全然ちがう！！」と多くの児童が声に出した。自分の学びが深まっていることをＣ児をはじめ子どもたち自身が実感した瞬間だった。

（3）成果

視点②：授業づくり

４年時の総合的な学習の時間の経験をもとに、日本全体の農業について、具体的な農業の現状を地域に根付く「市田柿」という地域教材を通して学ぶ単元を展開したことで、子どもたちが意欲的に追究し、市田柿の抱える課題を自分ごととして捉えることができた。また、市田柿が抱える農家数の減少という課題と、生産量や販売額はあまり変わっていないという事実から、持続可能な農業に向けて協力して努力している姿を学ぶことができた。

視点②：授業づくり　視点④：子どもの育ちにつながる評価（自分の高まりの実感）

単元を貫く学習問題を設定し、毎時間ごと自分の考えを振り返りとして書いた。この振り返りから次時へつながる課題を見出すことで、連続的な学びが生まれ、これまで自分の認識にあった社会的事象と新たに認識した社会的事象を関連させながら追究し、事実認識を確かなものとしていくことができた。また、これらの振り返りで子どもたち自身が何のためにこの学習をしているのかを確認しつつ、自分の考えの広がりや深まりを（成長）をはっきりと意識することができた。自信を持った子どもたちはその後の社会科の学習にも意欲を持ち、この単元で学んだ学び方を生かしている。

視点③：自他との関係

柿農家の河合さんやＪＡみなみ信州の梅田さんとの出会いによって「ひと」の思いや願いに直接触れ、子どもたちのもつ事実認識を意味や価値といった社会的認識へと高めることにつながり、人の生き方に迫ることで子どもたちの学びを深めることができた。

（4）課題

視点①：新型コロナへの対応

コロナ禍でどのように地域教材を扱い単元展開を構想していけばよいか。校外学習やゲストティーチャーの扱い方が難しかったが、社会科として子どもたちの深い学びにつなげていくためにも可能な限り準備をしていけるとよい。

視点④：子どもの育ちにつながる評価（自分の高まりの実感）

今回は、イメージマップをまとめてから単元を貫く学習問題の答えを記述したが、イメージマップをまとめることが作業的になる部分も見られた。単元を貫く学習問題の答えを記述してから、その理由や根拠をイメージマップで表現するという逆の方法もあったと考えられる。また、イメージマップのまとめ方も、自分の優先順位をつけながら書くことで、友だちに説得力をもって説明することができる手立てになったかもしれない。

３　泰阜・売木中学校の授業から

～中学校３年　公民的分野　単元名「泰阜村の未来について考えよう。」～

（１）授業の概要

本単元では、泰阜村の人口減少という事実を導入として、「持続可能な村であるためにはどのような取り組みが必要か」を、単元を貫く学習問題として設定し、その問いを解決していくために、地方自治の仕組みや財政について学び、村政に携わる人への調査や近隣の自治体との比較(売木中学校とのビデオ会議ツールを使った遠隔合同授業等)の中で、泰阜村の特徴について理解を深め、

持続可能な村づくりのための取り組みについて考え、村に対して提言を行った。

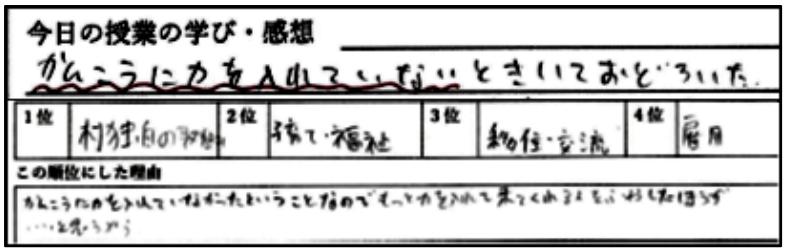
（２）授業の実際　～もの・こと・ひととの関わりの中で、単元を貫く学習問題への答えを考え続けることで自分の考えを広げたり、深めたりしたＡ生の学び～

①　漠然と人口減少を課題意識としてもつ（第１時）【「人口増加していってほしい」】

単元を貫く学習問題「持続可能な村であるためにはどのような取り組みが必要か」を設定した。この学習問題に対して、「人口増加していってほしい。」と記述した。

確かな事実認識

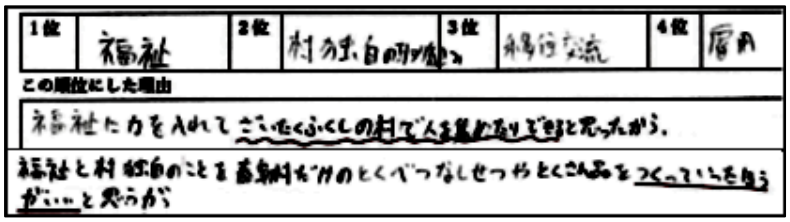
②「観光に力を入れるべきだ」（第４時）【前村長の話を聞き「村独自の取り組み」が１位に】



前村長から村の取り組みを聞き観光に力を入れていないことを知り、観光でもっと村の独自性を出すべきと考え村独自の取り組みを１位にした。

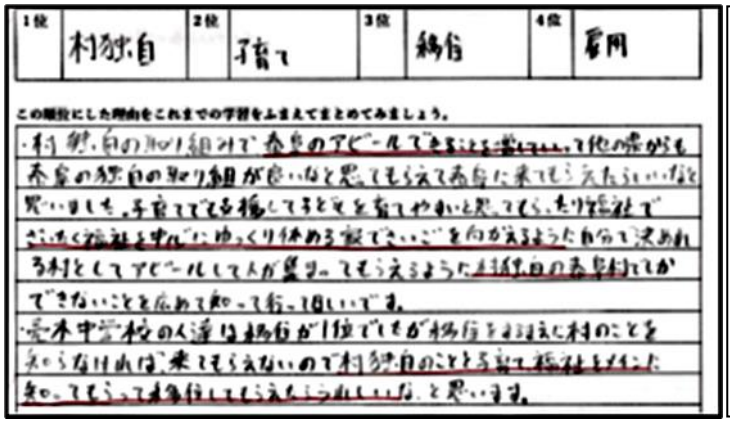
③　「在宅福祉の村で人を集められる」（第５～６時）【地域の方の話を聞き「子育て・福祉」が１位に】

比較・関連付け



住民福祉課長や子育て支援係の方のお話を聞いて、Ａ生は在宅福祉に注目し、子育て・福祉を１位にした。

④　泰阜村独自の取り組みを見直す（第７～８時）【売木中との遠隔合同授業を行い「村独自の取り組み」が１位に】

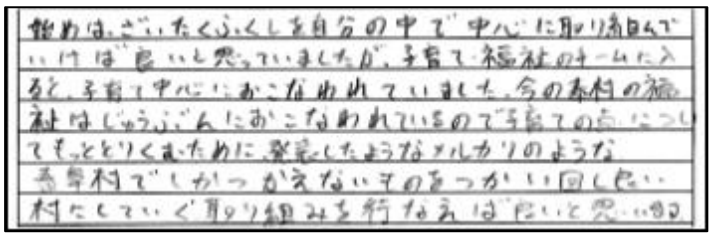


第８時のＡ生の発表
売木中の皆さんは移住が一位で、移住も大切だと思うんですけど、移住をしてくる前に村のアピールポイントが強いじゃないですか。そのアピールをするために、泰阜村では子育ての支援や、在宅福祉をやっていて、他の村とかでは一回一回施設とかに行ってお金を払わなきゃいけないじゃないですか。でも在宅福祉だとお金がかからずに自分の好きな家で最期まで迎えられることがアピールポイントだなって思いました。そのアピールをして村の人数を増やしていきたいなと思いました。

Google のビデオ会議ツールである Meet を使用し、売木中生徒との遠隔合同授業を行った。泰阜中生徒の「移住を促進するには独自の取り組みが必要では？」という問いかけに対して、売木中生徒が「既に『走る村』という取り組みがある。」と答え、さらに別の泰阜中生徒がその効果を問うと「一定の効果はある。」と答えた。このように各村の取り組みの共有、意見交換を行う中で、売木村の「走る村」という独自の取り組みを知り、「在宅福祉を中心に、ゆっくり最期を迎えられるように、自分で決められる村としてアピールして人が集まってもらえるように、村独自の泰阜村でしかできないことを広めて知ってほしい」と記述し、泰阜村では「在宅福祉」が独自の取り組みであると関連付けて思考し、「村独自の取り組み」を再び１位にしている。

⑤　「子育ての点についてもっと取り組む」（第９～１２時）【村への提言】

A 生グループの提案



村政に携わる方へ提言を考える中で、高齢者福祉だけでなく、子育て支援の充実へ視野を広げている。子育て世帯の負担軽減のため、物品の共有（リユース）を進める提案も行っているが、福祉に加えて「リユースの村」という、新たなコンセプトを提案に盛り込んだ背景には、売木中との遠隔合同授業が影響していると考えられる。

（３）　成果

①　「ビデオ会議ツールを使った遠隔合同授業」（視点①：新型コロナへの対応、視点③：自他との関係）

コロナ禍への対応が求められる現状で、直接の見学や交流は制限され、ICT 機器を活用した授業構想は今後ますます重要になっていくと予想される。本単元では、売木中学校との遠隔合同授業を行った。ビデオ会議ツールを通じて別々の学校が一つの学びの集団として機能したと言え、コロナ禍および小規模校における対話的な学びを続ける可能性を示すものである。

また、A 生は売木中学校との遠隔合同授業を受け、1 位「村独自の取り組み」2 位「子育て・福祉」と順位を変更している。村独自の取り組みを観光や特別な施設として捉えていた A 生が、売木村の取り組みを知ることで自分の村の取り組みを見直し、在宅福祉が村独自の取り組みになりうると学びを関連付けている。このように、他の自治体との交流によって考えの変容が見られたことも、遠隔合同授業での成果である。さらに、中学校間での交流だけでなく、相手校への発表があるということで、生徒がより主体的に同じ中学校内での意見交換を行うようになった姿があったことも、遠隔合同授業の効果といえる。

②　「地域の方への聞き取り調査」（視点②：授業づくり、視点③自他との関係）

単元の第４～６時にかけては、村政や村の活性化に関わる地域の方々への調査学習を行った。この学習で生徒たちは自分の知らないところで様々な人やお金が動いていることを知り、地方自治について具体的な姿を伴って捉えることができた。それによってさらに村について考えたいという意欲が喚起された。

また、A 生はこれまでの社会科での授業では、意見や考えを述べることは苦手としていたが、在宅福祉を泰阜村のアピールポイントとして自信をもって説明した。自身が責任をもって分担し、直接話を聞いたことで確かな事実認識となり、主体的で対話的な学びに繋がったと考えられる。単元の中に「ひと」とつながる調査学習を位置付けたことの成果と言える。

③　「4 観点の優先順位」（視点②：授業づくり、視点③：自他との関係、視点④：高まりの実感）

単元を貫く学習問題として「持続可能な村に必要な取り組みは何か」を設定し、「移住・交流」「雇用」「子育て・福祉」「村独自の取り組み」の 4 つの観点を定め、学習カードに毎時間その優先順位を記入した。これにより生徒の中に関連的な思考が生まれ、地方自治について多面的に捉えることにつながった。また、前時までの自身の考えを振り返ることができ、考えの変化や深まりを実感することもできた。優先順位を売木中と互いに発表する活動では、優先順位の違いや共

通点をきっかけに、その理由を主体的に知ろうとする対話を通して自身の優先順位を再考していく姿があったことも成果と言える。

（４）課題

視点②：授業づくり

優先順位を決める際に「移住・交流」「雇用」「子育て・福祉」「村独自の取り組み」の４つの観点で追究したが、どのグループも人口減少に歯止めをかけるためには、「移住・交流」が不可欠であることを実感し、「移住・交流」は前提とした上で、何を優先すべきか考えていた。教師側の観点の絞り方に課題があった。学習問題も「移住者を増やすためにはどうしたらよいだろうか」と焦点化して、４つの観点に「宣伝 PR」など発信方法を加えるなども検討が必要であった。

Ⅴ　本年度の研究の結果から次年度に研究すべき課題は何か

本年度の研究で主に三つの成果を得ることができた。それは

○コロナ禍で可能な学習方法（ＩＣＴ機器の活用、社会見学の見直し、遠隔合同授業）について探ることができたこと

○子どもたちが持続可能な社会（農業の存続、人口減少に伴う自治体の存続）について学び考えを深めたこと

○子どもたちが問いを持って学び続ける学習のあり方（単元を貫く学習問題について学習カードを用いて毎時振り返ることで、自分の成長を実感しその後の学習に生かすこと）を身に付けたことである。

残された課題から、来年度も研究することが望ましいものは以下の通りである。

１　視点①「新型コロナに伴う学習への対応」より

新型コロナを取り巻く学習環境は変化しつつある。今後も状況を見据えて追究していくことが大切である。

２　視点②「授業づくり」より

地域教材を扱うこと、単元を貫く学習問題を追究していく単元デザインとすることが子どもたちが主体的に学び考えを深めていく上で大切な要件であることが見えてきた。社会科の学習としては基本的とも言えるが、今後も大切にして追究していく必要がある。

３　視点③「自他との関係」より

新型コロナの影響で、他人と直接会い関わることは難しい状況が続き、小規模校の多い下伊那ではいかにして子どもたちが他者と関わり、他者の考えや意見に触れながら学ぶかは今後も課題である。本年度、ＩＣＴ機器を利用した遠隔合同授業で成果が見られたが、さらに様々な利用方法がある中でその特徴を把握し、より効果的な利用方法を探っていくことが大切である。その際には教師の利用スキルを高めることも必要となる。

４　視点④「子どもの育ちにつながる評価」より

単元を貫く学習問題と関わらせて毎時間振り返りの時間を設けること、単元の終末に単元の最初の自分の考えと較べてみることなどは子どもたち自身が自分の考えの広がりや深まりを（成長）をはっきりと意識するために効果的であった。だが、教材研究の不足から追究の過程で設定した学習課題が単元を貫く学習問題の追究の深まりにつながらないことがあった。社会科にとって教材研究が最も大切であることを改めて心に置きたい。